

編集部より Vol.11

A2—B—C・・・

いま福島で起っていること

ふと社長のブログを見ていたら、震災後の福島を撮影した映画があることを知った。14年前から日本に住んでいるイアン・トーマス・アッシュという外国人の作品だという。これは見なければいけないと思い、すぐ予約を入れた。以下は映画を見ながら暗がりですったメモから書き起こしたもので、言葉遣いやニュアンスなど正確ではない。間違いもあるかもしれない。しかし概要だけでもお伝えしたいと思い、映像もないメモ書きを掲載する事を、どうかお許しいただきたい。

特典映像 15 分

「みんなが忘れてしまうことが一番の問題…」17歳の少女がそう言っていたことが印象的だった…。「あなた達の勇気を忘れない…」怒っていいのよ…」アメリカ、イギリス、スイス、台湾、ウクライナ…、世界中から、熱く温かく、強い励ましのメッセージが続く…。



主催者より

江別の現在、0.07（別の機械では0.04） μ Sv。
映画画に出てくる数値とぜひ比べて欲しい。

主催 NGR 代表あいさつ（稲守さん）

NGRは、福島から札幌に避難した人々で2011年10月結成。年1、2回、保養と甲状腺検査のツアーを行っている。映画で描かれているのは、3.11から1年半後の福島。ここで起っている事は、同じ日本で起っていることだと分かっている。

自分がもし、原発事故にあったら、どう行動するか、ぜひ、そういう視点で見ていただきたい。



- 本編 -

（ある幼稚園の園庭）皆マスクをつけ、無邪気に遊具で遊ぶ子供たちの姿。ガラスバッチ（線量計）を衣服につけている。ローラー滑り台は危険だから遊べないと言う。ローラーの間に放射能がたまっているから、と子供たち。



（主婦）福島にいたら生命保険に入れなくなると言われた。中絶を選ぶ人が増えている。結婚しないという女性（高校生）すらいる。

（南相馬にある保育園の園長）2011年5月から園を再開。当初は0.3 μ Svあったが、除染して0.09 μ Svになった。国は影響ないと言っている。しかし、外からだけでなく、内部被ばくが心配。園内の給食では産地を選んで調達しているが、逆に家の食事が気がかり。水が一番心配。

（除染中の住宅）屋根瓦の雨どいをぞうきんで水ぶきしている26歳の男性作業員。2 μ Svの数値が出ている。心配ないかの問いに口ごもる。「正直言ってとても県内すべて除染できるとは思えない…。」

（主婦）子供たちが大量に鼻血を出した。ほかにも同じような子供が何人かいる。体に発疹も出た。病院に行くと風邪の診断。白血球の減少も見られた。風邪で血液検査されたのは初めて。

（伊達市市議）いくら除染しても山や森林が手つかずのため、風が吹けば元に戻ってしまう。IAEAは山は除染すると言っている。一番よいのはそこに立ち入らないこと。

（主婦）除染といっても山は手をつけず、家のホットスポットだけ。それで戻れと言われても、あなた

ここで子供を殺せと言われているようなもの。モニタリングポストは、除染した場所に設置されている。少し外れると高いのに、福島全体が安全と思われる。(市議) 雨どいの中は計測するなど通達があった。これはおかしい。問題提起しても日本の新聞はどこも取り上げてくれない。唯一アメリカのウォールストリートジャーナルだけ掲載してくれた。



(主婦) 学校の境界にあるフェンスのすぐ脇の草むらを計測する。立ち位置で3.9、…4 μSv 、…地面で8、…12、…42 μSv 。別の場所では、35、37 μSv も計測。敷地の境界には立ち入り禁止のロープが張られている。除染は敷地内だけ。風で飛んでくることだってある。本当に大丈夫なのか。学校側は問題視してくれない。今は、そのように言う自分の方が間違っていると思わされてしまう。

(主婦) 学校給食に福島産米を使うことが決まった。おにぎりを持参してよいというが、食中毒の心配があるので自己責任でと、遠まわしに言われる。子供達に牛乳を飲ませていないのはクラスで3人だけ(妹のクラスは1人だけ)。今のところいじめにはあっていないが、どうしてと聞かれる。

(主婦) 安全だとしきいわず、セシウムしか計測しない。なぜ? ほかに何種類もたくさんあるはずの放射性物質はどうなっているのか? いまでも原発からは放射能が漏れているのに、TVでも何も言わない。不思議でしょうがない。福島のTVでは、線量を毎日放送し、それが当たり前になってしまっている事の異常さ。

(主婦) 他府県に避難しようとしたが、自治体から事細かに書類が送られてきた。洗濯できないものは持ち込まないこと、布団は震災前のもので真空パックに入っているものならOK、それ以外はだめ、などなど…、まるでバイキン扱い。

(伊達市議) 2011年3月、4月、5月のヨウ素が一番あった時、避難させなかった。その中で卒業式、入学式も行われた。将来問題になった時、その責任はだれが取るのか。

(子供たちに) 《将来どういう日本に住みたい?》「放射能がなく、自然があふれる福島、いや世界全

体になったらいい。僕たちが変えていかなくちゃダメと思う。」

(主婦) A2とは、20mm以下のう胞あり。A1はのう胞なし。医大で診断したところ、A1判定だった。友人からセカンドオピニオンを勧められ調べたところ、A2判定。その後しばらくして、A1判定が出ている子はセカンドオピニオンでの再検査ができないようになった。医師会で取り決めがあったそうだ。山下教授からの指示らしい。

(主婦) だまされた。うらぎられた。1mm以下のう胞がいっぱいあるのに、異常とは言えないと言われた。うちの子はA2判定。

右は6つ、左はいっぱいで数えもしない。

今、A2判定が44%。初めのころは28%だった。増えた理由は、エコー技師が慣れてきたからだと言われている。



(A2判定を受けた小学生の子供たち) 「ガンや白血病になり、早く死んでいくと思う…」そう自ら語る。

(17歳高校2年生の女子)

《将来の夢は?》ダンサーになること、宇宙エンジニアもいい。

《今の福島についてどう思う?》「いま、一番問題なのは、みんなが色んなことを忘れてのことだと思う。私は気にしているが、周りはほとんど気にしていない。すぐに影響がなかったから。放射線に対する危機感が薄れている。」

《政治家に対して何かいうことはある?》「最初20 μSv も大丈夫と言ったが、なぜ大人と子供が一緒なのか? それに対して明確な答をもらっていない。私はA2。放射線の影響とは限らないと思うけれど…」

(子供たちに) 《これが映画だったらどんなストーリーにしたい?》「きれいな福島に戻ってほしい」

(主婦) もう戻れない。子供たちに申し訳が立たない。怒らないではいられない。奇麗事など言ってられない。

(主婦) 家の周りを測定したら0.4~0.5 μSv 。しかし一歩敷地から出るとどうなのか。とても安心などできない。一人の言葉は軽くあしらわれる。福島

の県内では特にそう。どうか県外の人に、世界の人に助けてもらわないと…。

(F i n)

NGR稲守代表

映画では甲状腺問題をクローズアップしているが、問題はこればかりではない。母子避難、二重生活、経済苦…。まだまだ多くの問題を皆抱えている。福島から避難されている小河原さんのお話を聞いてみたい。

小河原美保子さん。

2012年8月、中通りから避難してきた。3.11の時、次女が妊娠3カ月だった。川内原発再稼働で避難経路が問題視されているが、実際には大変なこと。実際あの時は、道路が陥没し、信号もなく、どこまでいけるかさえ分からない。そんな中での避難だった。しかし、そんなことは、それ以降のことからみれば小さな問題。

原発からは直線距離で60kmだった。泊から札幌と同じ。避難所に皆集まってきた。夜中に病院が倒壊寸前になり、患者さんたちも振り分けられて避難してきた。

3月12日、原発が爆発。13日朝、原発周辺の人々が避難してきた。命からがら逃げて来た人たちを受け入れた。着替えもない、風呂もない。本来なら、除染して、着替えて、それから…。今思えばあとの祭りだった。原発の避難は、1か月、2か月、1年、2年…。そんな簡単に終わらない。

この映画を見て、どうすればいい？って思うかもしれない。私は、福島の人にお金をあげてほしいと思った。好きで残っているわけではなく、好きで出てきたわけでもない。

1年前、60歳の知人の男性から電話があった。30代の娘が甲状腺がんになったという。「12人のサークル仲間のうち4人からガンが見つかった。悔しい」と泣きながら電話を掛けてきた。半年後再び電話があり、「原発事故のおかげで検査体制が整

い、早く見つかったよかった」と言うではないか。医師や周りの人に何を言われたのか、複雑な思いだ。そう言って今も福島に暮らしている。

つい最近聞いた話だ。B判定の中学生の娘がいる方。2次検査に県立病院に行ったら、隣の家の娘もB判定。うちの娘は、もう結婚もしないし、子供も産まないと言っている。国は大丈夫と言っているのに…、と。今回の映画に出てきているような人は少数。本当によく出演してくれた。実は、子供たちの方が、ネットなどでニュースソースを多く持っているのに、一般の親たちの方がわかっていない。

そのことをツイッターでつぶやいたら、リツイートが400あった。中にはチェルノブイリのかけ橋代表、野呂さんから激励もあった。

「チェルノブイリで甲状腺を切除した子どもたちも、愛する人をみつけて子どもを産んでいます。もちろん、薬や検査をうけながらの人生だけれど、でも…。その中を生き抜いていくために、私たち大人が、最善をつくすこと」。本当にありがたく、励みになった。



今、すでに50人の子どもたちが甲状腺がんと診断されている。他に38人が手術を待っている。

私はその人たちに何もしてあげることができない。逃げたいと思っている人たちに「北海道に來い」と言ってあげたいけれどそれができない。ジレンマの中にいる。

今日、郡山の野球場で高校野球の決勝戦が行われた。球場の線量は0.67 μ Sv。私たちはそれでも「がんばれ」といわなきゃいけない。

福島に住んでいると、みんなが同じ方向を向いて「がんばっぺ」と言わなければならない。映画に出ているような人は本当に少数。

なぜ、札幌に出てきたのかと聞かれることがある。今までいろいろ理由を言ってきたが、本当を言えば、私は、あそこから人がいなくなることが、一番の抵抗だと思って、ここに来たんだと思う。

福島ではこうはいかない。札幌は自由でいいところ。こうして堂々と放射能のことを言える。今じゃ東京だって無理。

もし、福島から来たという人がいたら、ぜひ隣人として「おはよう」と気軽に声をかけてほしい。

NGR 稲守代表

こういう大きな事故が起こった時、国は何もしてくれない。自分に置き換えながら、今から考えていてほしい。

NGRとは、“にげろ”の意味。自分の判断で迷わずに、何かあった時に逃げてほしい。自分たちもずい分被ばくしてしまったから…。

NGR 太田さん（道民として支援中）

Bはのう胞、結節 20.1mm以上。Cは甲状腺がん。一度検査を受けたら、「次は2年後」といわれる。それでは間に合わない。

北電による泊の避難経路視察に同行したが、はっきりいって避難できるわけがない。いったん小樽まで逃げてスクリーニング検査するという。そこで引っ掛かったらどうすると聞いたら、除染設備のある施設に移動するという。どこかと尋ねたら、岩内だという。馬鹿げている。被爆しに戻るようなものではないか。

福島の事故で放出された放射性物質の15%は内陸側に85%は海側に流れた。北海道は位置が悪く西風（偏西風）の影響で85%が来ることになり、札幌が直撃される。「220万人の札幌市民はどこに逃げればよいと言うのか。」と防災計画の勉強会で質問を投げかけると「受け入れ可能な自治体などどこもない」と他の参加者は語っていた。

編集後記

あたかも時間とともに風化し、何事もなかったかのように再稼働を着実に進める政府。そればかりか、困窮する福島を脇目に、秘密保護法を通し、集团的自衛権を事実上容認して、軍備増強・戦争へ向かって着々と駒を進めているかのようにさえ見える。

そして、原発や放射能という言葉さえ口に出せない空気が、この国の、どこよりも福島の地で蔓延している実態がある。さらに、一見平穏な暮らしを取り戻したかのように思える中で、静かに進む子供たちの窮状。A2から、B、Cへと…。

映画があぶりだしてくれたその事実から、目をそむける訳にはいけない。福島の子供たちに起こっている事は、泊を抱えるこの札幌でも、十分起こりうる事なのだ。

ここ数日、道内各地で観測された、^{もや}霧とにおい。ロシア森林火災に伴う高濃度のp m 2.5に包まれて感じたことは、当たり前前に思っていたきれいな空気が、かけがえのない本当に大切なものであったということ。窓を閉め切り、くつろいで深呼吸もできない生活が、どんなものなのか、初めて体感させられた。福島に住む人たちは、もう3年以上こうして過ごして来たんだろう。しかも回復の目処が立たない中で…。

そして、その空気によって、私たちはこの^{ほし}地球で一つにつながっているという事実に思い至った。中国の汚染もロシアの火災も、他人事ではなかったのだ。ましてや、目に見えず、匂いもしない福島の放射能も…。

ともすれば綺麗ごとを並べたがる自分。映画に出てきた主婦たちのように、怒ることを恐れてはいけないのだ。決して忘れてはならず、声に出し続けなければいけない。

そして、「自分はもう結婚できない…」そんなことを子供たちに言わせてしまった、私たちの責任を思う。“直ちには分からない”その影響には、時間だけが答えてくれる。しかし、そうってからではもう手遅れではないか。

狭い国土に54基も原発のある日本。いったい私に何ができるというのだろう。本当に、安全な世界、安心して暮らせる世界を手に入れるには、どうすればよいのだろう。

いずれにしろ私たちは、自らに与えられた「選択し創造する力」を行使する必要があるのではないか。

映画に出ていたあの子供たちのように、自らが、いったいどんな未来を選ぼうとしているのかを明確にしなければいけないのだ。その力こそが未来を創るものと信じる。人が夢見る力を侮ってはいけない。この世の多くのものが、夢とインスピレーションと、行動力から生み出されてきたものだから。

「おまえ、そんな事言って、どうやって俺たち食べていけばいいんだ」、とお叱りを受けるかもしれない。しかし、当たり前と思っているものが、いつまでもそこにあると高をくくってはいけない。

澄み渡る青空の下、何のわずらいもなく深呼吸できるその当たり前の幸せを、そして大切な人、大切なふるさとを、失ってからでは遅いのだ。

（文責：編集部 島田 浩）